



DVD連動企画

スポーツラジアル イッキ乗りテスト

定番国産4モデルVS注目のアジアン・タイヤという対決が見物となった
今回の最新スポーツラジアル一気乗りテストではドライバーに一般ユーザー代表のデカトー
そしてプロ代表として田中実サンを迎えそれぞれの目線から各タイヤの性能を評価していただいた

テストのために揃えた環境は下記の通り

ドライバーも内圧チェック



TPチェッカー

TPチェッカーは、各ホイールにセットした空気圧センサーからの情報をワイヤレスで受信し、モニターによって各タイヤの空気圧を運転中のドライバーがリアルタイムに確認できるというアイテムだ。これによって、いまま

ではピットインしてエアゲージで測定しなければわからなかった内圧の変化が運転しながらでもわかるため、ベストな空気圧を素早く探ることができるのだ。また、空気圧の上昇の早さもある程度読み取ることができるため、タイヤの発熱具合などを確認することもできる。

使用したホイール



Kosei K-1 Racing 17X9.0J 45

テスト条件を揃えるべく、ホイールも当然同じものをセット。使用したのはコーセイのスポーツホイール、K-1レーシングTSバージョンだ。K-1レーシングは、軽さと剛性を両立したダブル6スポークデザインが特徴で、シンプルながらも力強さを感じさせるそのスタイルは、S15シルビアとのマッチングも良好。使用した9.0J×17サイズでは、鋳造ながらも製造工程の中に鍛圧加工と呼ばれる特殊な工程を加えることで、鍛造に匹敵するリム強度を持たせている。

タイヤサイズ

すべて255/40R17

テストに使用したタイヤのサイズは、S15シルビアの定番サイズとなる前後255/40R17を装着した。シルビア以外のマシンでも多く使われる比較的ポピュラーなサイズといえよう

スタート時の内圧設定

冷間200kPaで統一

テスト時の内圧は、各タイヤとも冷間で200kPaからスタートした。もちろん、タイヤによってもベストな内圧は異なるため、銘柄によってはドライバーの指示で調整を行った



プロと一般代表の2人がそれぞれの視点から試乗
注目の6銘柄が集まった今年のスポーツラジアル一気乗りテストは、昨年までと少しテスト方法を変えて、様々な角度からタイヤの性能を検証してみた。まずテストの舞台となったのは、いま関東では最もホットなサーキット、袖ヶ浦フォレストレーヌウエイだ。1周約2・4kmのコースは、スピードの乗る高速コーナーからヘアピンのなタイトコーナーまでバリエーションが豊富な、タイヤテストにもうってつけなレイアウトだ。オマケに今回のテスト時は、基本本ドライ路面だったにもかかわらず、コースの一部には前日までの雨のために川ができるというコンディションであったため、ウェット路面の性能も垣間見ることができた。

そして、インプレッションはプロドライバー代表の田中実サンと一般ドライバー代表のデカトーという2名に、それぞれの視点から行ってもらった。走行の手順としては、まずデカトーが新品状態から全開アタックを8周し（ロータートラブルのため、一部減速あり）、次に田中サンがファイリングチェックを行うという順で敢行。そのため、新品時からの温まりの早さや一番タイヤがおいしいところでのグリップ性能、そのまま連続アタックを行ったときの性能変化などについては、主にデカトーのインプレッションを参考にしてもらうとわかりやすいだろう。逆に田中サンは、十分に熱も入って使い込んだ状態からの試乗となったため、ある程度走り込んでいくとタイヤの性能がどのように変化するか、というあたりから、そのタイヤの特性

テスト担当&進行役はこの面々



DVD収録の進行係♥フジトモ

全開走行後のフィーリングチェック&分析担当 田中実

新品時の全開フィーリングインプレ担当 デカト

テストでは、一般ドライバー代表(といっても腕はセミプロ級)のデカトが新品からの全開アタックによるフィーリングチェックを、そしてプロドライバー代表として田中実(全開走行後の走り込んだ状態でのタイヤの状態チェックとそこからわかるタイヤの使いこなし方などの分析を担当していただいた。さらにDVDでは、暴走しがちな(?)田中実を抑える進行係としてご存じフジトモが初MCに挑戦! こちらもファン必見だ!

テスト工程は下記の通り

- ① 新品タイヤを200kPaでセット
- ② デカトが全開のアタック走行
- ③ ドライバー交代&内圧、温度チェック
- ④ 田中実がフィーリングチェック走行
- ⑤ ピットイン後再度内圧、温度チェック

※ テストした順番はフェデラル→ヨコハマ→ダンロップ→グッドイヤー→トーヨー→ハンコックの順

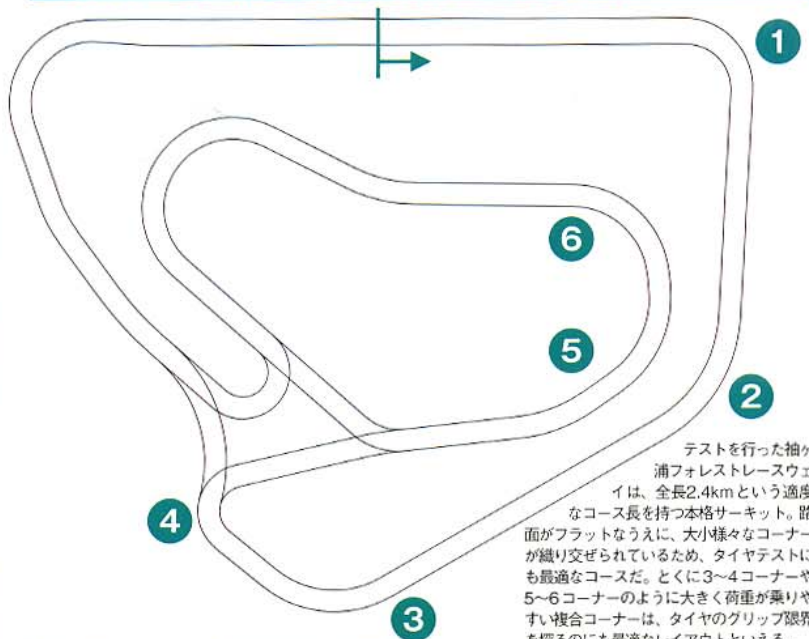
※ 4番目の走行時より、ブレーキローターの熱倒れによるジャダーが発生。グッドイヤーのみ6周ほど周回数が少ない

内圧&タイヤ表面温度表示の見方

各タイヤのテスト結果紹介ページでは、下のようなイラストでテスト走行後の内圧とタイヤ表面温度が掲載されている。それぞれ1はデカトの走行後のデータで、2は田中実の走行後データだ。ただし田中実は2の計測後、走行フィールによっては内圧を変更していることもある



テストコースは袖ヶ浦フォレストレースウェイ



テストを行った袖ヶ浦フォレストレースウェイは、全長2.4kmという適度なコース長を持つ本格サーキット。路面がフラットなうえに、大小様々なコーナーが織り交ぜられているため、タイヤテストにも最適なコースだ。とくに3~4コーナーや5~6コーナーのように大きく荷重が乗りやすい複合コーナーは、タイヤのグリップ限界を探るのに最適なレイアウトといえる。

現場でタイヤ組込み



ホイールは前述のコーセーK-1レーシングを3セット用意し、TPチェッカーの販売を手掛けるリンクアースの協力のもと、現場で1本ずつ組み替えるという方法でテストを行った。あらかじめ組んだ状態では、テスト時間によってタイヤの内圧変化などが起こることも考えられるからだ。ただし、テスト日は天候こそ快晴だったものの、気温は4月上旬ながら一日を通してほぼ10°C前後とかなり底冷えのする日だったため、テスト条件は各銘柄とも大きな差はないと思われる。

テスト車両はライトチューンのFR車

ARMS S15シルビア



テスト車両のS15は、シルビアのチューニングを得意とする長野県のプロショップ、アームズのデモカーだ。エンジンは吸排気チューンのみのライトチューンながら、足まわりはアベックスN1ダンパーをベースに、木下みつひろ選手と共同でセッティングを施したオリジナルのサスキットが装着されるほか、ブッシュ類やメンバーカラーなど、シルビアを知り尽くしたアームズらしい細部にまでこだわった完成度の高い仕上がりポイントとなる。



やオイシイ使い方などを解説してもらった。
テスト車両は、定番のFRターボ車、S15シルビアで足まわりを中心に手を加えたライトチューン車だ。テスト用のタイヤは、すべて255/40 R17サイズで、テスト条件を統一すべく装着ホイールもすべてコーセイのK-1レーシングで行った。また、今回から新たな試みとして、各ホイールにドライビング中にも空圧の確認が可能なTPチェッカーを装着し、各ドライバーに走行中の空圧変化を確認している(その模様はDVDで確認してほしい)。ちなみに内圧の設定は、各タイヤとも200kPaからスタート。各タイヤのインプレッションとともに、走行後の空圧とタイヤ表面温度の測定結果も紹介している(インプレッションと合わせてその数値をチェックしてもらおうと、タイヤの特性を理解するのに役立つはずだ。

田中実のDVDはココに注目!



「まず、デカトくんがスタート直後にわざとホイールスピンをさせたり、グリップが出てくるまでのフィールを探る動きをしていますから、そのあたりからタイヤの発熱具合が読み取れると思います。タイヤのグリップレベルは、コーナリング中のスキル音の大きさやリアのスライドする量、ステアリングの忙しさからも判断できますね。ただ一番の見どころは、何といってもボクのナイスツッコミだと思います!」